

愛しのマグカップ

打浪 綾

ここに一对のマグカップがある。去年の母の日に二男から贈られた。一方は濃紺、片方は淡い水色で、全体が尻細りではあるが分厚く、安定感があり、容量もたっぷりだ。夫と私がどちらかを選ぶ権利もなく、それぞれのカップに「おとん」、「おかん」と相田みつを風な書体で書かれてある。もちろん高価な代物ではないと分かっているもそこは親バカ、使うほどに口元がゆるむ。しげしげとこれを眺めていると、親となった遠い日から現在までの、息子との歴史が静やかに蘇ってくる。

あの頃は、二人の男子を育てるにあたり、私なりの家庭像を心に刻んだ。多分にTVドラマの影響と思われるが、私は武士の妻に強い憧れを抱いていた。厳粛な父、穏和で聡明な母。加えてそのような両親のもとで行儀良く、利発な息子たち。たとえて言うなら、

「お家のことは何一つ、ご案じくいただきますな」

「さようか、ではしかと頼んだぞ」

「父上、行ってらっしゃいませ」

玄関先にて、幼子とともに三つ指ついて送り出し、またお迎えを致す。ああ、なんと古式ゆかしい日本の来し方であろう。しかしながら時を経るごとに、古来のゆかしき家庭像は音をたてて崩れ去っていく。いつも着物姿でなおかつ、物差しを入れたような背中をもったりしく接しようとする三日ともたず、TシャツとGパン姿でガーガー吠えまくっている。親がこうであるのに、武士の体に育つはずもあるまい。

理想と現実の大きな隔たりを痛感する日々だった。長じるにつけ、更なる隔たりが待っていた。いわゆる非行である。息子はやっと入れた高校も早々と退学し、勝手に仕事を見つけて小遣いを稼いでいるようだった。真新しい制服に身を包み、さっそうと登校する高校生を目にする度に、私の胸も胃も痛んだものだ。

毎夜夫に訴えてはみるものの、建築設計事務所を立ち上げたばかりの頃で、猛烈に忙しく、心ここにあらずの心境だったのだろうか。

高校を中退したときも、

「勉強する気がないんやから、しゃーないやん」

次々仕事を変えたときも、

「遊んどるよりましや」

暴走族で警察の厄介になったときも、

「臭い飯を食ってみるのも経験や」

挙げ句の果ては、

「悪さをするのも根性や」

と、とりつくしまもない。

息子の二十歳を目前にしたある冬の夜のことだ。珍しく夕食時に顔を見せ、

「おかん、すまん。婆ちゃんになってくれるか」

そんな言葉を皮切りに、子供ができたから結婚させて欲しい。これからは真面目になる。ついてはおとんの跡を継ぎたいと。

「ちよ、ちよと待つてよ。お父さんの跡を継ぐって。あんたは中学しか」

それまで黙って聞いていた夫は、私の言葉を遮った。

「過ぎたことはしようがない。これからは家族を、またこれからなろうとしている家族を絶対に泣かさへんと約束できるか」

いくらおとんの跡を継ぎたいからと言っても、ああそうですか、ほな明日からどうぞというほど事は簡単ではない。それに甘えさせてもならない。

それからの息子はまるで人が変わったように頑張りを見せた。甘い誘惑に再度手を染めないために、遠く離れた田舎町にアパートを借り、新婚生活をスタートさせた。未知の地で大工の下手間につき、他に早朝から牛乳配達もやり生計をたて、空いた時間に勉学に勤しんだ。日曜日になると教科書片手に家族全員で我が家にやって来る日が二年余り続いた。その間に女の子も生まれた。暖かい部屋で夕食を共にし、初めての嫁、初めての孫と過ごせる日々はまさに至福のひとつきだった。けれども、男子とはやはり父親の背中を追うものなのか。それに引き換え母親は、せめて温かい料理を作るくらいしか能がないのかと、一抹の寂しさも覚える。

やがて帰宅時間となり送りに出る。明日からまた、暗いうちから寒空の下での仕事が続いてると思うと、涙が出そうになる。

あんまり頑張らんでもええんやで。おかんはあんたが真面目になってくれたそれだけで十分なんよと親バカの思いと、決して泣きごとやうんじやない、自分が蒔いた種やろ。

二つの心が微妙に交差する。見送った庭先では、紅葉の枝先から最後の一片が音もなく散っていく。

やがて二年後に二級建築士資格を取得し、やっと夫の設計事務所に入ることを許された。二十歳の春のことだった。

「あんた、アホやなかつたんやなあ」

「俺はやるときはやるんや。もつとも、背水の陣やけどな」

おおー、さすが武士の倅や。三つ子の魂が効いていたのか？ だけど息子よ、母の日に贈ってくれたこのマグカップ、せめて「父上」、「母上」と書いて欲しかったなあ。

兄弟と箸

山本 築

祖父母の家には私と三つ上の兄のお揃いの箸があった。母親に連れられて祖父母に会いにいくたびに、箸立てからそれぞれの箸を取ってテーブルに並べるのがいつもの食卓の風景だった。私の箸は緑色に唐草模様があしらわれたもので、兄の箸は同じ模様を青塗りの上に浮かべていた。実家では色の塗られていない木箸を誰のものでもなく使っていたので、自分だけの箸があることは妙に嬉しく、その色鮮やかな箸で祖母のつくった料理を口に運ぶたびにどこか大人びた気持ちになった。

祖父母は賤に敵しいほうではなかったが、食事のあとは必ず自分たちで箸を洗わせた。

「箸は大事な命を口に運ぶもんだけん、自分で感謝して洗わんといかん」

祖父は口癖のようにそう言って、私たちを台所の流し台の前に立たせた。スポンジに泡をつけて丁寧に擦ると、二本の箸は私の手のなかで滑らかに動きまわった。いつも先に兄が泡を洗い流し、それを競うように私も冷たい水のなかに手を入れた。洗い終わったものを布巾で拭こうとすると、水滴のついた箸はまるでお風呂上りのように上機嫌に見えた。

「ほら、よく拭いたらこっちで乾かさんと」

洗った箸の仕上がりを確認するのは祖母の役目だった。祖母の目に適った箸は晴れて水切りかごのなかに置かれ、ほかの食器たちとともに乾くのを待った。

祖父母の家には月に一度ほど顔を出していた。祖父母はそのたびに喜んで二人を迎え入れてくれたが、やがて小学校に通いはじめると、学年が上がるごとにその回数は減っていった。それは行動範囲が広がるにつれて同級生たちと遊ぶ楽しさを覚えたためだった。あるいはまた、兄とのあいだに上手く説明のしようのない溝ができたためでもあった。何か特別なきつけかけがあったわけでもなく、私たちは互いに距離を置くようになっていた。当時の私はその関係の悪化にいくらか戸惑いながら、しかし、以前のように気安く口を利くことができなかった。

そのような関係に唯一修復の兆しが見えるのは、やはり祖父母の家を訪れるときだった。その回数こそ減ったものの、お盆や正月には母親に伴われて祖父母と顔を合わせた。兄と私はほとんど無言のうちにそれぞれの箸を食卓に並べた。そして例によって食事のあとは並んで流し台の前に立たされた。いくらか塗装の剥けた互いの箸が冷たい水に洗われる。そのようなときは、祖母の視線を背中に感じながら短い会話を交わすこともあった。

「形はちぐはぐな箸のごたるばってん、どがんしても兄弟やけんな」

祖父母はそんな私たちをからかうように年甲斐もなく笑い合った。私はその訛りの強い言葉に関心のないふりをしながら、それでも兄と顔を見合わせて苦笑しないわけにはいかなかった。

やがて祖父母が亡くなると、その小さい頃からの習慣もなくなり、家屋の取り壊しの際に箸の所在もわからなくなった。私たちは互いに家庭を持ち、それぞれ実家から離れた場所に暮らすようになっていた。

「兄ちゃん、箸の洗い方雑だったよね」

「お前もよく台所の床ば水浸しにしよったな」

大人になった私たちは当時の不仲がうそのように以前の兄弟に戻っていた。もちろん、男兄弟に起こりがちな些細ないさかいはあった。それでも帰省して祖父母の仏壇に手を合わせると、いつかの祖父母の言葉が思い出された。

祖父母の命日には互いに都合をつけて毎年墓参りをした。夜は兄弟揃って実家に泊まることになり、その家族も含めて大所帯でテーブルを囲みながら賑やかなひとときを過ごした。子どもたちにはそれぞれの箸が用意され、食事が終わると台所の流しの前に集められた。

「箸は命を口に運んでくれるもんだけん、感謝の気持ちば込めて自分で洗ってみらんね」

兄は幼い頃からよく聞かされていた言葉を息子に向かって伝え、そのそばに立っていた私と目を合わせて屈託なく笑った。いつか不揃いな箸と笑われた兄弟は年を重ねるごとに背丈も顔もよく似てくるようになった。私はいくらか深くなった目尻の皺に笑みを返し、台所の流しに視線を戻した。そして、覚束ない手つきで箸を洗う子どもたちの背中を見守りながら、耳の奥で祖父母の懐かしい声を聞いた。

石走る垂水の上の

篠 鷹之

海がすぐそばにある神戸の図書室だった。

のんびりしていて街なかの図書館のように混んだりすることはなかったので、私にとっては隠れ家のような存在だった。

「垂水」という地名も気に入っていた。

いつも持参した歴史書を読み耽って半日を過ごす。目が疲れると、そのまま会館の裏から防波堤まで歩いて行き、ぼんやり淡路島を眺め、魚籠の中の釣られた魚を覗いたりした。就職の氷河期だった。たまに求人票を覗きに行っても、はつきりと「文学部は除く」と書かれていて、夢を失っていた日々だった。

その日も暗い気持ちで図書室の隅の机で小説を読んでいた。常連の利用者は、新聞を読んでいる退職後らしき人たちや、予備校生が多かった。

昼に会館の中でランチを食べて席に戻ったときのことだった。見知らぬ女性が離れた席からつかつかとやって来て突然私の隣に座った。初めてみる女だった。三十前後に見える。小太りで、髪を束ね、地味な服装の女だった。

「兄ちゃん、ちよつとごめんやで。この漢字、何て読むんやろ？」と唐突にたずねてきたものだから私はもうびっくりしてしまった。

どぎまぎしながら女の太い指先を見ると、「挿絵」と「折角」という漢字だった。私が答えると、「ふーん、そうなんや」と納得したが、自分の席には戻らずにそのまま私の横で読書を始めた。そして、わからない漢字が出てくるたびに、「兄ちゃん」と本を差し出すのだった。そのたびに静かな室内に声が響く。私は焦った。司書の中年の女性に目で助けを求めたが、素知らぬ顔で手元に視線を落としている。私は途方に暮れてしまったが、女を振り切って帰ってしまうほどの度胸もなかった。女が読んでいる短編小説が、「姥捨」だったことが私を踏みとどまらせたのかも知れない。作者の井上靖は好きな作家だった。

錦秋の涼しい日だったが、女は額にうっすらと汗を滲ませながら、真剣に読んでいる。声は出さないものの、しきりに唇を動かしていた。何度目かたずねられたとき、「ほかの人の迷惑になつたらいけないので、少し声を落としましょうか」と言うと、女はハッと打たれたような表情を見せ、「兄ちゃん、ごめんな。うち、氣いつかへんかったわ」と小声で謝った。女の、ほんとうに申し訳ないという表情に、私は一瞬うろたえてしまった。

女は、たずねてもいないのに、声を落としてしゃべりはじめた。

「うちな辻というねん。職場の人らに負けたくないねん。そやから、時間があつたらここへ来て本を読んで勉強しよう決めてん。あんた大学生やろ？ うちに漢字教えてや」

“そんなん困りますから”とも言えずに、私は曖昧な顔で、きつとうなずいたに違いないが、今となっては思い出せない。

「次は、これを読もうと思うねん。この題名、なんと読むんやろ？」と『天平の甍』を差し出されたとき、私は急いで立ち上がって書架から『しろばんば』を取ってきて薦めた。これは鮮明に覚えている。漢字だらけの『天平の甍』に挑戦されたぶんにはとてもたまらないと思ったからだ。

それから週に三、四度、私は辻さんの読書の手助けをした。辻さんはどこかワン・テンポずれた人だったが、気弱な私にはない芯の強さがあり、頑張り屋だった。職場の意地悪な同僚たちの話を聞かされるうちに、私は会社や売り場の大変さを教えられた。

「兄ちゃん、選り好みせんと働き場所を探しや」と熱心に尻を叩いてくれました。別れは突然、春にやってきた。

大阪での就職が決まったのだ。

私が垂水を去る二週間前くらいだったろうか、辻さんが『万葉集』の中に垂水の歌があったと手柄顔で教えてくれた。

石走る垂水の上のさわらびの

萌え出づる春なりにけるかも

志貴皇子

「兄ちゃん、垂水の歌やで。これ、どないな意味なん？」「垂水は滝のことやから。滝のそばで蕨の芽を見つけて、ああ春が来たんやなあ、と喜んでる歌やと思いますわ」

ずいぶんと適当な解釈に、辻さんの表情がパツと明るくなったのを私は見逃さなかった。

「やっぱり、春は来るんやな。兄ちゃんにも来たし。うちにも来てくれるかな？」

「はい、辻さんには毎年きつと来ます。こんなに頑張ってはるんやから、来ないわけがない。

辻さんの家庭教師のぼくが保証します」

そのとき、いつになく饒舌な私がいた。

私は垂水を去るとき、”今日が最後です”とはついに言い出せなかった。

ただ、いつものように、”さよなら”とだけ言って図書室を後にした。

春が訪れるたびに、”石走る”、明るくて芯の強い辻さんのことを、私は思い出す。

本のおうち

茂木 麻子

小さい頃から本が好きだった。本といっても、読書ということではない。もちろん読書も好きだが、本を本棚に仕舞うということが、どういうわけか異様に好きだったのだ。

幼稚園の頃、女の子の友だちはみんな、リカちゃん人形や小さな人形のおうちに夢中だった。彼女たちの持っている人形のおうちで一緒に遊ぶことはあっても、自分も欲しいとは、なぜか思わなかった。だから私が持っていたのは動物のぬいぐるみとブロック、それに絵本がほとんどだった。

当時シングルマザーだった母は、朝から晩まで休みなく働いていた。私には兄弟がいなかったので、家ではいつも一人で遊んだ。一番お気に入り遊びは、絵本を同じ高さ、背表紙の色、マークの絵柄などで分けて本棚にきれいに並べることだった。一度並べた本をまた全部取り出して、前とは違う順番で並べ直す。それを飽きもせず繰り返すのだ。本棚といっても、母のお下がりのカラーボックスだった。その古い緑色のカラーボックスが、私には人形のおうちならぬ「本のおうち」だった。新しい絵本を買ってもらうと、どんなお話かということよりも、新しい遊び道具が増えたことにわくわくと胸が弾んだ。たまたま自分が持っているのと同じシリーズの絵本だとわかると、さらに心は躍った。絵本はまるでここが自分の定められた場所だと言わんばかりに、シリーズの中に納まった。それがなんとも言えぬ満足感を与えてくれた。

小学生になると図書室が使えるようになった。本を借りる時、図書カードに日付と題名を書き入れてカウンターに持って行く。高学年の図書委員さんが貸し出しの欄にハンコを押してくれる。カウンター越しの彼らは大人びて立派に見える、私の憧れの存在だった。時折、「いっぱい読んだねえ」などと声をかけてもらおうと嬉しすぎて何も言えず、顔を赤くしてただぶつきらぼうに頷くことしかできなかった。高学年になり、私は迷わず図書委員に立候補した。憧れのカウンター業務に就くと、かつて自分がしてもらったように、低学年の子たちに声をかけた。普段の自分より面倒見のいい、親切な上級生になれた気がした。

六年生の時には図書委員長になった。しかも私のいた六年四組の教室は、図書室のすぐ隣だった。係の図書委員がどんなにきれいに整理整頓しても、休み時間が終わるとぐちゃぐちゃに乱れている本棚の本。この終わりなき戦いに、私は喜び勇んで身を投じた。授業の合間の五分か十分の休み時間にも図書室に走り、放課後も遅くまで残り、本の整理整頓に没頭した。見回りの先生につまみ出されるようにして家に帰ることは日常茶飯事だった。

本のあるべき場所に仕舞うことに、どうしてあんなに心を奪われたのだろう。今思えばそれは、不安を取り去り、均衡と平和の中で自分の位置を確かめるための、無意識の儀式のようなものだったのかもしれない。

中学生になると思春期の少女らしく、友達や部活やクラスの気になる男の子のことに興味が移った。それでも、学校帰りに毎日立ち寄る商店街の本屋さんで、五十音順から外れた文庫本などがあるかどうかでもそっと正しい位置に戻さずにはいられないのだった。

十八歳で大学進学と同時に故郷を離れ、二十代の半ばで結婚して、三十代の半ばに離婚した。長い話し合い、細かな取り決め、押し寄せる名義変更や住所変更に引越しの準備など、精神的に疲れ果てて体も思うように動かなかった。けれど気を抜けば一気に押し流されてしまうようで怖くて、目の前の用事を一心不乱にこなした。ほとんど何も考えずに持ち物を整理し、処分し、残りを箱に詰め込んで実家に送った。故郷から遠く離れた土地での十年余りの結婚生活だった。

実家に戻りしばらくして、重い腰を上げ届いていた段ボール箱を開けた。他所の土地で人生の半分を過ごし、戻ってきた私の元に残った物。衣類など身の回りの品は驚くほど少量で、あとは全て本だった。初めてのアルバイトのお給料で買った本、失恋した時に元気を出そうと買った本、付箋だらけのぼろぼろの本……。必要に迫られるまで長い間放ったらかしにしていた、たくさんの本。無造作に詰めこまれた段ボール箱の中以外に居場所がない、私の古い友だち。いつの頃からか、自分さえ我慢すればと気持ちを殺し、心を放ったらかしにしていた。そんな自分を見ているようでやりきれない気持ちになった。

ぐちゃぐちゃだっていいじゃないか。もう一度、箱から出して並べ直せばいい。時間をかけて手をかけて、あるべき場所を探せばいい。長い人生、間違いも失敗もなく生きるなんて無理だ。本がそう言っているようだった。

あれから十年。今、私はアメリカで暮らしている。日本からはるばる海を越えてきた私の本は、そのサイズにぴったりと合うように手作りした本棚に、順番通り、きちんと納まっている。



朝のトースト、サーカスの魔法

関根 一華

平日の朝はいつも出勤時間ギリギリに起きてバターバターするので、朝食はジャムかバターのトースト一枚だ。パンを焼くのに使うのは、旧式のオーブントースター。食パンが横に二枚並べられる小さな箱状のもので、パンを金網に乗せて焼くとミッキーマウスの顔が浮かび上がる、という楽しい仕掛けつきだ。最初は綺麗な銀色だったのだが、毎日休まずに私の朝のバター付き合っているうち、くすんで、内側にはパンくずやたまに乗せるチーズの焦げ付きもできてきた。跳ね上げ式ではないので、グラタンや簡単なお菓子作りもできる。

このトースターは、私が七歳の時に我が家に来てきて以来、ずっと実家の納戸にしまい込まれていた。久しぶりに日の目を見たのは私が社会人になって、実家を初めて出るようになった時だ。母が丁寧にしまっておいてくれたので、それは十五年のブランクをもとめせず、すぐ動いた。

栃木の母方の祖父母と、巡業サーカスを見に行った日だ。初めてのサーカステントに大はしやぎしていた私は、本当に幸運なことに、そのサーカス団の公演のちょうど一万人目の来場者選ばれた。来場者ゲートをくぐったところで祖父がスタッフに呼び止められ、席にはつかずにステージ袖に通された。そして団長の開演の挨拶とともにステージにあがり、幸運な来場者として紹介されることになった。初めてのスポットライトと満場の拍手に圧倒されながら、祖父がようやく抱えられるくらい大きな包みを受け取り、地方紙の記者のカメラに向かってぎこちない笑みを返す。残念なことに、突然壇上であげられて緊張してしまったからか、サーカスの演目のことは今ではほとんど覚えていない。ただ、帰りの車の中で祖父母が私に何度も、よかったねえ、すごいねと言ってくれたことは覚えている。

家に帰って包みを開くと、それは銀色に輝くトースターだった。

それからしばらくこの「一万人目」の件は、私が人一倍幸運で特別な力を持っていることの証左のように、親戚中に語られた。私もしばらくはその力を信じていたが、学齢が上がり、やることとがどんどん多く、また複雑になっていくごとに、自分はむしろかなり運が悪いほうか、または幼少期に田舎のサーカスで使い切ってしまったのだと思うようになった。そして大学受験で志望校に落ち、まったく行くつもりもなかったすべり止めに通うことになったとき、私の「サーカスの魔法」は完全に消滅したと思った。その後も嫌なことは続き、大学入学直後に母に完治しない病気が見つかり、家族で切り盛りしていた実家の稼業も次第に立ち行かなくなってきた。家族全体が、じわじわと追い詰められているような閉塞感にしばらくの間とらわれていた。

なんとか大学を卒業して仕事に就き、実家を出ることになったときは、大変な状態の家族を置いて家を出ることはとても不安で、一人だけ逃げ出すよううしろめたさもあった。しかし母は私の独立を応援してくれて、私がどこにしまったのかも忘れていたトースターを出してくれた。その銀色の小さな箱を見たことで、「新居に行けば、このトースターを思う存分使うことができる」と、気持ち少し上向きになった。そして今は、どんなに疲れていても、仕事に行きたくな

くても、食。パンの上でミッキーマウスが笑うのを見るたび、一日のがんばる気持ちりが湧いてくるようになった。「私は『一万人目』なんだから」と。これは間違いなく、失くしたと思っていたサーカスの魔法だ。

一緒に壇上で拍手を聞いた祖父は、私が十二歳のときに他界してしまった。祖母は今も元気で、時勢に遅れまいと最近スマートフォンを買ったらしい。トースターを使っているところを写真に撮って送ったら、あの魔法の一日を思い出して喜んでくれるだろうか。

既読スルーで繋がっている

望月 由美子

「すみません、逃げます！」のメールを最後に息子が居なくなって十一年が経った。

楽天家で人の好い子だった。親が言うのも何だが、中学までは勉強しなくても成績がよく常に三番以内だった。全然嬉しくなかった。良い成績を取るより、努力することの価値を知ってほしかった。そんな心配をよそに勉強らしいものを一切せず、県内で有数の進学校に受かってしまった。流石に勉強しないと駄目だろう現実を前にしても、彼は自分流を通した。陸上部で砲丸投げの記録をつくり（全国大会には届かなかったけれど）、文化祭では『アルジャーノンに花束を』の脚本を起こし観客に大受けし、体育祭では紅組の総大将を務めた。この時は、母の秘蔵ビデオ、バリの「ケチャ」を勝手に見て入場のパフォーマンスを構成し、最後は棒倒しで落下し意識を失う始末。つまり「お祭り男」だった。おかげで随分と楽しませて貰った。先生方からも可愛がって頂いた。

しかし、いくらお祭りが好きでも、勉強嫌いでは大学受験を乗り越えることはできない。二浪の末ようやく受かった私立大学に滑り込み、一年留年してくれた。二年間の浪人時代は予備校に通うふりをして麻雀に明け暮れ、留年時はアパートに引き籠っていたと、ずっと後になって告白された時は眩暈を覚えた。さらに、両親が教師であること、特にオカンに強いプレッシャーを感じていたと聞かされ、この子をダメにしたのは私か？と真剣に悩んだ。

そのくせ、教員採用試験を受けては落ち続けた。劇団員の友人に誘われ訳の分からない活動をしたり、女の子に振られて落ち込み何日も帰って来なかったりと、私には苦痛の種でしかなかった。努力することは「人として当たり前前なこと」と信じてきた私は、彼の生き方を受け入れることなどできるはずがなく、怠け者で現実逃避している情けない男としか思えなかった。

ある日、息子を甘やかしているダメな両親に私の兄から喝が入った。兄は私の数倍の努力家であり、福島県で小さいながらも実績のある住宅会社を経営していた。その兄が「甘やかすのもいい加減にして俺に預ける！そのブヨブヨした体と心を鍛えてやる。」と半ば強制的に息子を東京支社に入社させた。この時息子は二十七歳になっていた。

反対すべきだった。兄の会社は社員教育がとりわけ厳しくついていけない訳がない。そう知っていたのに、私は自分の手元におくのが負担になっていた。結果、半年後に息子は身を寄せていた叔母の家に荷物を置いたまま行方をくらまし、数日後「逃げます！」のメールが私に届いた。

最初の二年間は「情けない。」と嘆いてばかりいた。次の三年間は育て方を間違えたと自分を責めた。この三年間が私にとって最も辛かった。

しかし、不思議なことに息子は携帯電話の番号もアドレスも変えなかった。電話には出なかったがメールは送信できた。時折「どうしてる？」「困ったことがあったら連絡しなさい。」「何があっても親子なんだから。」「誕生日おめでとう。」「などと、一方通行の文章を送っていた。

そうして時が過ぎていく中、息子の近影をFacebookに見つけた。いつの間にかLINEも繋がっていた。LINEはカジュアル過ぎて好きではなかったが、この時ばかりは天にも昇る思いだっ

た。「既読」が付くと息子と繋がっていると実感できた。

FacebookとLINEのアイコンは、どうやら彼の結婚式の写真らしかった。正装した息子の後ろに「Happy Wedding♡」と書かれた文字が読み取れる。酔ったらしい赤い頬、丸い童顔、嬉しそうな笑顔は紛れもなく私の記憶にある息子そのものだ。手作りの式を友人達が開いてくれたのだろうか？どうせならお相手の写真も載せてくれよ！と楽しく想像した。そして、息子を情けなく思ったり、自分を責めたりの日々が少しずつ溶けていくのを感じた。

数年前、苦しさの余り愚痴をこぼす私に友人がこう言った。「生まれた瞬間から、子は親と別の人格を持っていると思う。たまたま母親のお腹から生まれただけ。その子の考え方も生き方も全部受け入れられない限り、何かある度に苦しい思いをする。母親を忘れた訳ではないのだから、会える時が必ず来るよ。」

そうだ、息子の人生は息子のもの、私の人生は私のもの。お互いに今を精一杯生き、胸を張って会えるその日が来るのを待とうと、考えられるようになった。

今は写メで撮った道端の花や旅先の景色などを添えて送る。相変わらず返信はないがそれでいい。今の関係が私達親子の自然体なのだ。アイコンに自分の結婚式の写真を使ったのは息子の最高の気配りだったに違いない。

ありふれた毎日も

福井県立羽水高等学校 辻谷 侑海

私の心の中には後悔と罪悪感、そして少しの安堵があった。それはおそらく無意識に感じていた恐怖心の表れなのだろうと思う。興味はあっても実行する勇氣はない。そんな自分自身に嫌気が差すけれど、もう過ぎたことにはどうしようもない。こう言い聞かせた。

私には何をするにも大義名分を探してしまいう悪い癖がある。逃げ道を作って保険をかけている。自分を否定されることが怖いから。

去年の九月、高校の文化祭で献血バスが来た。そこで私は初めて献血バスをあんなに間近で見た。こんなところにも来ているんだ、と少し驚いたのを覚えている。時間があつたら行ってみよう。そう決意したのだが、当日は所属していた茶華道部の仕事があつたため、私がその場所に着いたのは、既に受付時間が終了した後だった。

高校への登下校の道。そこから一本裏に入ると献血センターがある。存在は知っているけれど、それほど知らない。その程度の知識しかなかったものの、興味は同世代の子よりもあつたと思う。私が初めて献血を知ったのは小学生の頃で、年齢的に献血は不可能だった。いざ十六歳になり、基準を満たすようになって、その悪い癖は治ることなんてなかった。大義名分がないために実行できなかった。毎日近くを通っているにも関わらず。

学校祭から幾日か後の昼休み。「献血行きたかったなあ。」後悔の念も含めていつもより気持ち大きめにこう呟いた。自分から話すことが少なく、声も小さい私からすると勇氣を出したほうではあつた。一緒に昼食をとっていた同じクラスの友人にはどう反応されるだろうか。この時、おそらく私は否定の言葉を期待していた。期待していたという表現は少し語弊があるかもしれないけれど、行かなくてもいいと言われることで、免罪符が欲しかった。実際に、文化祭中に献血できなかったことを茶華道部の友人に話すと、「なんで行こうと思ったの?」「普通行きたくないでしょ。」とネガティブな言葉をかけられた。学生生活での一大イベントである文化祭で、友達との時間を削ってまで献血に行こうと思う人のほうが少ないのだろう。少しもやもやした心中だったけれど、茶華道部での仕事の片付けもあつたため、そこまで深く考えなかった。そんなことを思い出しながら友人の言葉を待つ。「私も行きたい!」予想もしていなかった返答だった。こうした会話から、その友人と献血に行くことがとんとん拍子に進んだ。思いも寄らず、誘われたという大きな大義名分を手にした私は、献血するという小学生の頃からの小さな夢を叶えることになった。

わざわざ、休日に女子高校生が二人で献血に行く。傍から見たら物好きだと思われても仕方のないような気もする。学校祭が終わった翌々週の土曜。友人との集合場所である近くのスーパーでふと我に返り、苦笑した。そこから自転車で数分漕いだところに献血センターがある。はやる気持ちを抑えるように、ゆっくりペダルを踏んで、彼女と他愛もない話をしながら目的地へ向かった。

人生で初めての献血は何ともあつさりしたものだった。採血は、意外にも十分程度という短時

間だった。採血前のヘモグロビン濃度の測定では、若さ故の高数値を叩き出した。こうして献血バスが学校に来た時の恐怖心とは裏腹に、無事何事もなく終わった。彼女も私と同様につつがなく採血は終了した。多少の右腕の痛みはあったけれど、念願の献血ができたことへの満足感でいっぱいだった。

初めての献血が終わり大きな目的を果たした後に、この日は図書館へ行った。特に何をすることもなければ、本を探したり読んだり、いわゆる普通の時間を過ごした。ガラス戸から夕陽が見えるようになったから、外へ出て二人して写真を撮った。今どきの若者ならこういうときに二人で記念写真を撮るなどするのだろうけれど、普通を好まない私たちはただ風景だけを撮っていた。それでもそんな時間が心地よくて、今日は充実した一日だったなあと心の底から思った。

ほんの少しの勇気でこんなにも有意義な日を送ることができたのだから、私と彼女との関係により深めてくれた献血という妙な存在には、感謝してもきれない。もしそれがなければ、彼女とここまで親しくなることはなかっただろうと思う。私たちの勇気が誰かの希望になることを願って、これからも献血を続けていきたい。

この日以降も彼女とは何回か献血に行くことになるのだが、毎回用が終わってからどこに行くのかをあらかじめ決めない。ゆっくり自転車を漕ぎながら、「次、どこ行こうか。」と話す時間も嫌いじゃない。大抵はそんなことをしているとあつという間に夕方になってしまう。毎度毎度飽きないことに、その風景を写真に収めて画像を送り合う。そんな献血後の写真は、なんの変哲もない風景だけでも、とても美しく思えた。

風が吹いて

福井県 仁愛女子高等学校 宮下 陽奈子

小学四年生の時、私は北海道にいた。野生動物が人間と同じように暮らしていて、となりの森を十秒も見つめればキツネやリス、まれに鹿などを見つけることができるような場所だった。そんな集落に一つ、小中合同の学校があり、全校生徒は十五人、そのうち三人は私の兄弟というとても小さな学校に通っていた。ただ、学校は小さかったがその世界はとても広がった。スーパ―やコンビニ、飲食店などは何一つない。ましてや遊園地などの娯楽施設などもつてのほかであった。しかし私は暇な時がなかった。学校に行ってみんなと会って話して、勉強して、お昼を食べ、また授業を受けて、そんな日常のことがすべて楽しかったのだ。下校ですら楽しかった。何をしても楽しかった。私はそこから可能性を感じた。自分は何をしても楽しむことができるのだ、まわりの環境次第で。そう考えたのは、何年前のことだっただろうか。私はいつのまにか高校生で、何を目標として、何の理由でこの世界を生きているのかわからない日々を過ごしていた。

地鳴りが聞こえた。その後地面が大きく揺れて、初めての揺れの体感に震えていた時のことだった。ピコン、と通知音が鳴った。LINEだ。こんなときに誰だろうと思いつながら確かめると、久しぶりの名前があった。北海道にいたときの友人だった。たった三人しかいなかった同級生のうちの一人だ。どうしたんだろうと思っただけ、深くは考えずにLINEを開いた。

「地震、大丈夫？」

思いがけない言葉だった。

「大丈夫。ありがとう！」

返信しながらも、こんなに早く連絡をくれたことに驚いた。福井で地震、というニュース速報を見て心配してすぐにLINEを開いてくれたらしい。

「無事で良かった。元気？」

ニコニコ笑っている顔文字が、友人の笑顔と重なって見えた。

「元気だよ」

そう書いたら、ほんとうに元気が湧いてきた気がした。友人は北海道で、私は福井で、六年も経っていて、ずいぶん離れてしまったと思っていたけれど、パツとつながった気がした。懐かしい顔が浮かんだ。あの頃、楽しかったな、と思った。小さな集落にいたけれど、世界は広がった。それに比べて、今はどうだろう。年齢が上がり、経験値も上がったはずだ。当時通っていた何十倍もある学校に通い、不自由のない大きな町に住んでいる。それなのに、世界は広がっていないように感じる。むしろ、なんだか息苦しいような閉塞感さえ抱いている。何も自分の思うようにはいかず、自由ではないような気がしている。それは、なぜなのだろう。

十歳の私は、世界は広い、と知っていた。十勝の空は青く、突き抜けるように高く、ふいに地球の大きさをずしんと感じる瞬間があった。森の中には生きものの気配が満ちていて、同時に、生きものではないものの気配もあった。言葉にするのは難しいけれど、今、自分が、こんな

に山奥の森の中で元気に楽しく生きていること、その不思議さがあふれ出して、「私はここに  
いる！」と叫び出したいような気持ちになったのだ。

もしかしたら、私は大事なことを忘れてしまっていたのかもしれない。毎日の課題に追われ、  
忙しい学校や人間関係に縛られているような錯覚にとらわれていた。

友人から連絡をもらったことで、私の心に風が吹いた。あの頃に感じていた、どこにいても私  
は楽しく生きていけるといふ感覚がよみがえった。どこでどんなふうにも生きてもいい。そのこと  
を久しぶりに思い出した。ふわっと気持ちがゆるんだ。そうだ、私は自由だった。そう思った  
ら、目の前が明るく開けたような気がした。



大きな傘

福井県 仁愛女子高等学校 永田 みなみ

両親が共働きだったため、私は幼少期の多くを祖父母と過ごすことになった。保育園への送り迎えも、祖母が来てくれることが多かった。今でも鮮やかによみがえる、祖母との大切な思い出である。

祖母と二人で駐車場まで歩くのが、私のお気に入りだった。特に雨の日が最高で、祖母は必ず一つの大きな傘をさして、私のことを濡らさないように肩をぎゅっと抱きしめ、距離をぐっと近づけてくれた。その体勢になると私はきまって、祖母の腕に抱きついていて、晴れの日以上に近いこの距離感が大好きで、大きな傘を軽々とさしている祖母は、私のあこがれの的だった。

「かっこいいな」

そう思っては、見上げていたのを思い出す。

「おばあちゃん、今日は私が傘さしたい。」

傘の中で私が祖母に言い出したのは、いつのことだっただろう。大きな傘をさすことへのあこがれと、私はこんなに大きな傘でもさせるのだということ褒めてほしいという気持ちがあつたのだ。提案は柔らかく退けられた。

「まだ小さいからもうちょっと大きくなって、おばあちゃんがあなたより小さくなったらさしてね。」

一瞬、どうして私に傘をささせてくれないのかと、少し寂しく思った気もする。けれどもすぐにそんな気持ちは消えていた。幼い私は、早く大きくなりたいと思うようになったのだった。

同級生で並んでも、背の順はいつも前のほうだったから、私はなかなか、祖母と交わした約束を実現することができなかった。ただ、身長が祖母に追いつくまでに、思春期が私に追いついてきた。

中学生になった私は、今まで平気であったことが、急に恥ずかしく思えたりして、自分を扱いかねていた。

その頃祖母は、よく私に花を持たせてくれていた。

「教室にお花があると、雰囲気明るくなるでしょ。」

祖母はいつもそう言っていた。保育園に通っていたころからの習慣が、私が中学生になってからも変わらず続いていたのであった。

思春期真っただ中の私には、なぜだかそれがとても恥ずかしかった。花を持って歩いている自分は周りからどんな風に見られているのか、気になって仕方なかった。

「今日はお花持っていないからね。」

朝早く、私の家まで花を届けてくれた祖母に向かって、中学生の私は、冷たく言ってしまうた。一瞬自分の放った言葉に後悔したが、「ありがとう」とか「ごめんね」という言葉が出てこなかった。思春期という厄介ものが、邪魔をしていたせいでと思う。

「わかったよ、じゃあまた今度ね。」

祖母は少しも怒らなかつた。

思春期も高校受験も乗り越え、もうすぐ高校生になるといふ春が来た。そのころには私の身長も一五〇センチを超えて、祖母よりも少しだけ大きくなつていた。

その日は雨が降つていた。祖母の家の玄関から、車のある駐車場まで傘は一本しかなかつた。祖母が傘をつかみ、空に向かつて勢いよく傘を広げた。

「私がさすよ。」

私は自然にそう言つていた。

「ありがとう。」

祖母は優しく返してくれた。

心のどこかで、まだ早いよと言われてしまうのではないかと、私は不安を抱いていた。だからその祖母の言葉は嬉しかつた。あまり嬉しかつたから、私は傘を持つ手と反対の手で、祖母がいつもしてくれていたみたいに、肩をぎゅつと抱きしめた。

祖母は降りしきる雨の中で、確かに何か一言ぽつりとつぶやいた。

「何か言つた。」

雨の音でかき消された祖母の声を、私は聞き取ることができず、たずねてみたが、祖母はさりげなく返すのだった。

「何でもないよ。」

確かに何か言つたのに、それがどんな言葉だつたか、とうとう教えてもらえなかつた。それでも、傘の中にいる祖母は、いつも以上に優しく、どこか嬉しそうで、それでいてほんの少しだけ寂しい目をしていた。

いかんすかまかちん

福井県立藤島高等学校 宮脇 虎太郎

パンクは突然やってくる。小春日和の朝の爽快な気分が台無しになった。家を出たときから、こいでもこいでもエネルギーがどこかに放出されているいやな予感がしていたが、やはりこうなる運命だったのだ。車輪の衝撃が直に伝わる自転車で、駅から高校までのかなりの距離をのろのろ走る。

学校からかけた電話に出たのは祖父だった。祖父の携帯にかけたのだから当たり前だ。「自転車がパンクしちゃって、帰り軽トラで迎えに来てくれない？」深い沈黙の後、なんやってか？と聞き返された。ちなみに祖父の耳は遠くない。何度も何度も同じことを噛み砕いて説明し、やつと事態を飲み込んでもらえた。これは想定内。祖父は陽気な天然ぼけで、酒を飲んでいない時も酒に酔っているような人だった。その割、家での態度は大きい、所謂団塊世代の典型であった。僕はそんな祖父をばかにする訳でも非難する訳でもなく、反ってなついていた。奇妙な言動がおかしく、呆れつつも祖父と過ごす時間はいつも楽しいものであった。

迎えに来た祖父の様子がいつもと違うことはすぐに気がついた。ぶっきらぼうで冷たいのだ、とにかく。海の方の仕事場から直接自家用車で来たので、軽トラで取りに来るのは今度にしようということになった。それだけ話すと、足早に車に乗り込んでしまった。僕が遅れて乗り込むと、祖父と孫を乗せた奇妙な車は走り出した。こうして祖父と二人でデートすることは今までにあっただろうか、多分初めてだ。そして、この機会を僕は偶然手に入れた訳ではない。電話をかける相手は親でもよかったのだ。

初冬の駅前には華やかなオレンジ色に包まれ、意外にも車通りは多かった。学校のことや毎日のこと、片っ端から質問してくる祖父に、ひとつひとつ丁寧に答えながら、気づいたことがあった。もうこの人は僕を子供として見てはいない。それは単純な喜びであった。同時に、小さい子に異様に優しい、僕が知っている祖父とはもうお別れな気がして寂しくもあった。200mほどしか離れていない近所に住んでいるとは言っても、矢張り会う機会は田植えと稲刈りぐらいだったので、祖父への印象は昔のままだったのだ。

将来の話になった。具体的な会話は記憶にないが、「僕は都会に出る」と言ったときの祖父の鬼の形相はバックミラー越しにも伝わってきたのを覚えている。

「あほ、そんなことはあかん。」

突拍子もない発言に戸惑いつつも、そのままの意味のことを言っているんだとすぐに気づいた。普段怒らない祖父がこんなにも深刻な表情をしていたので、祖父にとってはただごとではないことを悟った。この険悪な雰囲気からはやく抜け出そうと必死に発言の撤回を試みたが、それは困難を極めた。

「正月とかお盆とかは帰ってくるつもりだよ。」

「それならいいけど。」

なーんだ、と思った。そんなことだったのか。遠回しに近くに来てくれということ言ってるだ

けじゃないか。祖父らしい不器用な愛情がとても嬉しかった。

電車通りを抜け、家へと続く田舎道のラーメン屋さんに寄った。バターラーメンをたのむ祖父を見て3年前を思い出した。中学二年の冬に吹奏楽の大会で良い賞を取って、この店で家族が祝ってくれたのだ。あとき確か祖父もかけつけてくれて、バターラーメンをたのんでいたような…。

テーブルに並んだ2つのバターラーメンはもんでもくもくと湯気を立て、祖父のメガネをくもらせた。これぞ好物といった、ラーメンにくらいつく無邪気な姿は僕の知っている祖父だった。

いろいろな話をした。僕の話だけでなく、自身の経験も話してくれた。高校時代のこと、経済的な理由で大学に進学できなかったこと、一番うえのお姉さんが亡くなった時のこと、東尋坊の自殺防止ボランティアで2体の遺体を発見したこと。どれもこれも初めてきく話ばかりで驚愕だった。祖父は僕の知らないところできざまな苦勞をし、数え切れない経験を通じて、いまここにいる。その尊さを実感した。僕にかける言葉にもひとつひとつに意味があったのだ。

「最後に、これだけは言っておきたいのだが、兄弟仲良くな。」

祖父の優しい笑顔は僕のこれからに希望を持たせた。やってもやってもおいつかない勉強も、遠すぎる学校も、大変なこと全てが、尊いことのように思えた。無理に自分にむけられた期待に応えようとするのではなく、支えてくれる誰かに感謝することが一番大事だと気づいた。僕は自分を見失っていたのかもしれない。

「僕からもひとつ、ばあばに優しくね。」

祖父は小さく頷きラーメンをすすする。

パンクしてよかったと思った。

七色の百円バス

福井県立藤島高等学校 小原 優輝

その日は部活が七時半まで長引き、へとへとになり、僕は最終のコミュニティバスに乗って家に帰った。そこで、七人の人の人生を見たのである。

七時四十分、ピンク色の塗装の小さいバスが来た。車体には笑顔のマークが一面にわたって印刷されており、雨の日も風の日も台風の日もいつも笑顔でやってくる。下校時にいつも使っている路線だ。そして、十分も遅れてやってくるのもいつも通り。

車内には、五人の人が座っていた。僕の前には中年のおじさん。後ろには同じ学校の先輩。そして、向かい側のロングシートには、濃い化粧をして、たいそう派手な格好のお姉さんが三人座っていた。

そういえば、このバスは繁華街も経由し、停留所が一つ置かれている。お姉さんたちはそこで働いていて、これから出勤なのかもしれない。「終電で出勤」とは。いろいろな人がいるものだなあ、と思う。

商店街の名前が大きく書かれた看板の下をくぐり、バスは活気づき始めた夜の街へと突入していく。予想通り、お姉さんたちはそこで降りていった。すると、入れ替わりに、松葉杖をついたおばあちゃんが、重い足取りでゆっくりと車内に入ってきた。ノンストップバスだが、それでも段差を登るのがつらそうだった。本当にいろいろな人が乗ってくる。

そのおばあちゃんは、一分もバスに乗らないまま、次の停留所で「次、止まります」ボタンを押してしまった。これには驚いた。百円と安い運賃ではあるが、これでは大阪駅から新大阪駅まで特急で行くようなもので、勿体ないなあと思ったりもした。

しかし、停留所について、バスを降りようとしたとき、手にした松葉杖を車外に落としてしまったのである。見ていた僕はさらに気の毒に思った。おばあちゃんは、どうすることもできずにうろたえているようだった。しかし僕の方もどうすることもできずにいた。

すると、前に座っていた中年のおじさんがすぐに席を立ち上がり、車外に出て、松葉杖を拾い、おばあちゃんに渡し、さらに手を添えて降りる手伝いまでしてあげたのだ。

僕は、あつけにとられて見ていた。衝撃的なことが続いたからだ。実際に夜の街で働いている人。そして、体が不自由な年配の人とそれを助けてあげる人。道徳の教科書のように「心温まる」前に、強烈な電気ショックを受けたかのようになった。それは、おばあちゃんを助けてあげるといふ行動を当たり前のようにとっさにできたおじさんへの驚きか、それとも、当たり前のことをできなかつた自分への驚きなのだろうか。そして次の瞬間、僕の脳裏をよぎったのは、「人生」という二文字だった。

今まで、バスに乗り合わせた人のことなんて気にしたこともなかったし、「一般人」として見ていたのだ。しかし、今日乗り合わせた人たちは、それぞれが確かな個性を持っていた。当たり前前なのだが、ようやく気付かされたのだ。製塩所まで取材に行つて帰ってきた僕。受験を控えていて遅くまで学校に残つて勉強していた先輩。いつも夜の八時に出勤しているお姉さん達。松葉

杖をついて歩き、横断歩道が危険で渡れないからだろうか、停留所一つ分だけのために百円を払ったおばあちゃん。そして、それを当たり前のように助けてあげる紳士的な心を持ったおじさん。さらに、僕たちのような乗客のために夜遅くまで働いている、今バスを運転しているお兄さん。同じ人間、同じ百円バスの乗客なのに、ここまで違いがある。僕はバスに乗ってから起こった出来事を反芻した。

それは、今まで積み重ねてきた「人生」の多様性だった。僕のまわりは、「一般人」や「他人」などと粗雑にまとめてはいけないうような、多種多様な「人生」を生きている人々であふれていたのだ。

その後、おじさんと先輩は次の停留所で降りてしまい、僕だけが車内に残った。定刻より十五分も遅れて、バスは駅に到着し、まだ先ほど見た光景が目には焼き付いて離れないまま、バスを降りた。その後、行先表示が「回送」に変わり、ピンクのバスは車庫の方へと行ってしまった。

七人の人たちは、明日からも、それぞれ異なった七つの色の「人生」を生きてゆく。そう考えると、駅前を歩き交っている、乱暴な言葉では「人の群れ」と形容されてしまうような人たちにも、それぞれの「人生」があるのだと思われて、僕の目の中で、一人一人が全く違う色の輝きを発しているように見えてきた。

いろいろな人がいるものだなあ、と思う。

屋台の金魚

東京都立府中高等学校 田代 彩葉

「ねえ、金魚だよ、金魚！」

友人と行っていた夏祭りから帰った妹は、弾む息も落ち着かぬうちにそう叫んだ。浴衣姿の右手には、ビニール製の小さな巾着。その窮屈な水の中では、目が覚めるような紅の金魚が二匹、ゆらゆらと静かに泳いでいた。

「帰り道にね、知らないおばさんに貰ったの。屋台ですくっただけけどウチじゃ飼えないからよかったですらあげるわ、って。」

祭りの興奮が冷めないのか、頬を赤く染めた妹は、幸せそうに二匹を眺めている。宝物を手に入れ無邪気にはしゃぐ、まだ小学生の幼い彼女に、家族は優しく微笑みかけた。よかったね。大事にしなさい。

そんな中、私はただひとり、心中穏やかではなかった。確かに、紅色の金魚は可愛い。しかし、それ以上に気にするべき重大な問題があったのだ。暢気に談笑する両親と姉、妹に対し、私はその言葉を恐る恐る口にした。

「ねえ、これって、どこで飼うの。」

そう、我が家には金魚鉢がなかったのだ。水槽の他にも、餌やポンプなどの道具はおろか、水槽を置ける場所すらないようなこの家で金魚など飼えるはずがない。私の言葉に皆の表情は曇り、部屋は重苦しい空気に支配された。息の詰まりそうな沈黙の中、父は慌てて場を取り繕うように口を開いた。

「そりゃあ、まあ……。探せば水槽のひとつくらいあるだろう。とりあえず今日は、適当なバケツにでも入れておけばいいさ。」

能天気な発言に、一斉にブーイングの声が上がる。何それ、可哀想。うちのバケツ、小さいじゃん。死んじゃったらどうするの。

「そもそも、何で貰ってきちゃったの。」

誰かがぼそつとそう言った。妹はついに泣き出してしまった。こぼれる大粒の涙は、ぼろぼろと音が聞こえてきそうなほどだった。皆で彼女を慰めるので手一杯で、その話はそれ以上されることなく終わりとなった。

結局、金魚は小さなプラスチックのバケツに入れられ、居間の隅に置かれる事になった。妹が寝て、両親が寝た後も、私は冷たい水の中をじっと覗き込んでいた。姉も気になるのだろう、横で同じように水面を見つめていた。

「ねえ、どう思う。この金魚。」

私が尋ねると、すぐに返事が返ってきた。

「うーん。可愛いよね。見てて飽きない。」

水の上で姉がくるくると指を回すと、金魚はそこにぶかぶかと近付いてくる。ほらね、可愛いでしょ。そう言わんばかりに得意気に微笑む。どうやら、同じ行動をしていながら、私と姉は全

く違ふ事を思っていたらしかった。やがて姉も自室に戻ってしまい、一人残された私は、なおも小さな魚を見つめ続けていた。彼女の真似をして指をくるくるしてみると、一匹が水面に近付いてきた。私の胸はひどく痛んだ。ひもじいのかな。寂しいのかな。もう一匹の方は上がってくる元気もないらしく、底の方でじっとしていた。もし、もつと環境の整った家に貰われていたら、妹がおばさんと出会わなかったら。屋台の金魚なんか生まれなかったら。そうしたら、彼らは今、こんな場所でこんな思いをしていなかったはずだ。可哀想。愛おしさに比例するように、その気持ちは膨れ上がり、心を飲み込んでいく。たかが金魚で、と笑われるかもしれない。しかし、その時の私は、床につく事も忘れるほど、憐憫の念に苦しめられていた。

翌朝、一匹が死んでいた。おそらく昨夜弱っていた方だと思う。妹は黙って庭に金魚を埋め、雑草の花束を手向けた。もう泣かなかった。生きているもう一匹の方の金魚は、近所に住む祖母宅に引き取られることになった。昔飼っていた時の道具が一式残っているそうで、餌さえ買い足せば今すぐにも飼えるという。水槽が賑やかになって嬉しいわ、と歓迎していたそうだ。そして金魚はその日のうちに引き取られていった。空っぽになったバケツを見て、私は肩の力が抜けていくのを感じた。すっかり安心しきった私は、段々と金魚の事を忘れていった。ただ、妹だけは毎日彼らの元へ通い、面倒を見続けていた。

どれくらい経った頃だろう。家族で祖父母宅を訪れた。妹は私を水槽の前へ引っぱっていくと、餌の入った袋を差し出してきた。

「ねえ、餌あげてみて。可愛いよ。」

言われるままに、餌をばらばらと水面に撒く。すると、金魚はその花弁のようなひれを揺らしながらやってきて、綺麗にそれを平らげた。出会った頃より一回り大きくなった金魚は、生命力に溢れ、その美しさと愛らしさで見る者の心を魅きつけた。

「金魚さん、うちに来てくれてよかったね。」

妹の言葉を聞いた時、私は自分をひどく恥ずかしく思った。私が持つべき感情は、憐れみではなく愛情であった。不幸を嘆くことではなく、幸せにする努力をすべきであった。妹は同意を求めるように、微笑みかけてくる。しかし私は、彼女が眩しくて、羨ましくて、目を合わせることができなかった。



「母は強し」

福井県 仁愛女子高等学校 今井 奏

「母は強し。」昔はその通りだと思っていた。泣かないし、弱音も吐かない。そんな母を見て、「大人は泣かないんだ」と思っていたこともあるくらいだ。それに比べて自分はいつまでも泣き虫で、すぐに泣きごとも言う。高校生になった今でもそうだ。毎日毎日、つらいことだらけだ、面倒なことだらけだと思っただけで生きている。

そんな私が母の「弱い姿」を見たのは人生で二度だけだ。一度目は、私が高校受験の校内推薦に通ったとき。学校から私が校内推薦に通ったと母の携帯に電話がかかってきた。夕飯のときだった。私と母はとても喜んだ。「よかったね」と優しく微笑みながら私を祝ってくれた。しかし父は違った。「なにそれ、聞いてないぞ」と言うのだ。しかしそれはおかしな話だった。私は進路希望調査表と推薦希望の紙にある保護者の認印を、父に押しもらったからだ。それを言うのと、父は激昂した。氷のとけて水滴のついた酒のグラスを机に叩きつけ、煙草を取り出して、「聞いていない」を繰り返すのだ。いよいよ私と父は口論になった。お互い一步も引かなかった。そんな中、母が「ごめんなさい」と一言だけ言った。そちらを向くと、母は泣いていた。私が初めて見た母の泣き顔だった。続けて母は、「全部私が悪いから」「今日だけは喧嘩しないで、祝ってあげて」と言った。もちろん母が悪いことなど一つもなかったが、母はずっと「ごめんなさい」を繰り返す。声はかすれて引きつっていたし、顔は真っ赤でぐちゃぐちゃだった。私と父は口論をやめ、父は困惑した様子で部屋に引きこもってしまった。私は言葉が出ず、とにかく泣いている母を抱きしめて、「ごめん」と小さく言った。母の背中を撫でながら、何度も「ごめん」と繰り返した。私が言葉を発するたびに、母は「うん、うん」と、私の肩に顔をうずめ、細かい声で小さく頷く。いつもとは立場が完全に逆転していた。私は自分の進路なんてどうでもよくなっていた。それよりも母の悲しんでいる顔の方が、鮮烈に私の脳を支配した。この母の泣き顔を見たとき私ははじめて、「お母さんは特別強いわけではなく、ずっと私のために我慢していただけたんだ」と思った。この人のことをもう、自分が泣かせてしまっただけでいいかと思っただけだ。

二度目は、私と母が喧嘩したときだ。喧嘩のきっかけは今となっては全く覚えていない。そのくらい些細で、どうでもいいことだったのだろう。しかし、私が母に言ってしまったことは今でも鮮明に覚えている。私は母に対して、「嫌い」と言ってしまったのだ。それでも母は私がおんなことを言ってしまったあとも、態度こそ冷たかったが、私のための家事もしてくれた。翌朝、できたての朝食を食卓の上に置いておいてくれた時、私ははじめて母に自分から「ごめんなさい」と言った。しかし母は「いや」と言った。頑なな母の態度に困惑して、私は何度も「ごめん」を繰り返した。しかし母は私の言葉を受け入れてはくれなかった。これ以上為す術もなくなってしまう私は、いよいよ俯いて黙り込んでしまった。そして私のそんな情けない様子を見て、母はその重い口を開いた。「なんで嫌いなんで言うの。」その瞬間、母の目からは大粒の涙がこぼれ落ちた。二度と母に悲しい思いはさせたくないと、私のことで涙を流させてはいけないと思っていたのに、私の心ない言葉によって、私は母を傷つけてしまった。私はとにかく母を泣き

止ませようと、母に抱きついた。いつもは優しく抱き返してくれる母も、今回ばかりは首を振って、私を拒絶した。そのとき私ははじめて分かった。母に拒絶された瞬間、頭の中が痺れるような感覚がして私の目にも涙が溜まっていた。私のしたことは重大なことなのだと分かった。私は泣きながら母にしがみついたが、母は体を激しく動かして私を振り払おうとした。しかししばらくして私のしつこさに諦めたようで、いつものように優しく、私を抱き返してくれた。母は何も言わなかったが、私は母を強く抱きしめたまま、「ごめんささい」を母に言った。

「母は強し。」この言葉は私の中で当たり前ではなくなり、しかし、そう思うきっかけになった出来事も、こうして文字にでも起こさないと、なかなか深く、強く思い出すというのは難しい。しかし母をもう傷つけ、悲しませたくないという思いは、実感として私の中に強く残っている。そしてその感情を掘り起こせば、なぜか私の目には自然と涙がたまる。母は決して強い人ではなかった。だが、私に対する母の愛は世界で最も強いものだった。

私には年の離れた兄が二人と年子の弟がいる。私の兄弟は小さい頃から仲が良く、兄は私と弟をととても可愛がってくれている。私の家は野球一家で、みんな野球に関わっている。父は兄が小さい頃からずっと野球を教えていて、休日は必ず、父と兄は野球をしに出かけていた。平日の仕事終わりでも、兄を誘ってキャッチボールをしていた。父にとって何よりも大切な時間であった。

兄の高校卒業を機に、父と兄の間から少しずつ会話が減っていった。毎日していたはずのキャッチボールや野球の話聞くことも無くなってしまった。どちらかが避けているわけでもなく、ただただ二人の間には気まずい空気だけが流れていた。毎日楽しそうに食卓を囲みながら、父と兄が野球の話で盛り上がっているのを横に座って聞いていることが好きだった私にとって、とても寂しいものであった。

そんなある日、兄から彼女を紹介された。小柄で、笑った顔が可愛くて、とても優しい人だった。休日に部活の大会があると、私の家族と一緒に応援に来てくれたり、暇なときは兄の運転で彼女と一緒に買い物へも出掛けた。後部座席から見ると二人の後ろ姿は、うらやましいくらいに幸せそうだった。いつでも楽しそうにニコニコ笑う兄の彼女を、私の家族はみんな好きだった。

そして去年の夏、兄の結婚が決まった。もちろん私達は大喜びをした。姉や妹がいない私は、優しい義姉ができて本当に嬉しかった。それと同時に、とても寂しくなった。兄は婿養子として家を出て行ってしまふからだ。けして口には出さなかったが、一番寂しそうにしていたのは父だった。あまり兄とは口をきいていなかったが、兄が出掛けていると、いつも父は

「どこにいるんだ、いつ帰ってくるんだ。」と誰よりも心配していた。大切に育ててきた息子を手離すことは、本当に辛かったと思う。

結婚式が近づいてきたある日、夜に明かりのついたリビングをのぞいた。そこには父と兄が楽しそうに野球を見ながら、お酒を酌み交わしている姿があった。久しぶりに並んで座っている二人の背中を見て、涙が出そうになった。残り少ないこの家で時間を大切に過ごしたいという気が、兄の笑った顔から伝わってきた。その日から、よく二人は一緒にお酒を飲むようになった。みんなで囲む食卓にも、笑い声がたくさん響くようになり、ご飯が楽しかった。

結婚式当日、兄の真っ白なタキシードは、とてもよく似合っていてかっこ良かった。誓いのキスをかかわした二人は、幸せそうに微笑んでいた。披露宴では思い出ムービーや友人の余興などで盛り上がった。そして最後に、兄はサプライズで両親に手紙を読んだ。母と父に感謝の言葉がたくさん書かれていた。父への言葉に

「小さい頃から野球を僕に教えてくれてありがとう。ずっと言えなかったけど、お父さんの息子に生まれてきて、お父さんに野球というスポーツに導いてもらえて最高に幸せでした。」

と涙を流しながら精一杯伝えていた。普段口にする事ができない気持ちだが、たくさん込められた手紙だった。手紙と一緒に花束を渡した時、父は思わず兄を力強く抱きしめた。父と兄がこんなにも近くで触れ合ったのは、久しぶりであっただろうか。強く抱きしめ合う二人を見て、私

は心の底からこの家族で良かったと思った。両親から大切に育てられ、たくさんの愛情を注いでくれる、そんな家庭を私も早く持ちたいと思った。なかなか感謝の言葉を口にすることは難しく、何だか照れくさいが、これからは素直に伝えていきたい。きっと、何度もぶつかってしまうかもしれないけれど、父と兄のような堅い親子の絆を私も築いていきたい。

今年、全世界を襲った新型コロナウイルス。オリンピックが延期になり、学校が長期間休みになり、さらにはマスクやトイレトペーパーを買い求める人々でドラッグストアが今までに見たことのないくらい混雑した。

これは、このコロナ禍の中、私の身の回りで起こった、マスクに関わる出来事である。

今年の4月初め、私の母が、うちの店で、ご飯を食べてくれたお客さんたちに手作りマスクを配ってみてはどうか、と言ってきた。私の家は飲食店で、いつもは会社のサラリーマンの人たちや、近所のおじいさん、おばあさん、遠足で来てくれたと思われる小、中学生の子たちなど、いろいろの方が来てくださって、成り立っている。しかし、今年はこのもの、緊急事態宣言も出され、外出はできる限り控えようというステイホームの風潮の中、外食に来る人はあまりいなかったのだ。

この話を聞いて、私はすぐには賛成しなかった。マスクが置いてあるからといって、お客さんは増えるの？戻ってきてくれるの？そう考えると難しい気がしたのだ。しかし母は「来てくださったお客さんがさ、なんか、マスクあるといいじゃん。かわいい柄のやつとかも作ってさ。」

そう言っていて、マスクの材料を買ってきた。裁縫が得意な祖母も手伝ってくれた。出来上がった布マスクは大人の男性が着けていそうな青の縞模様のもや、女の子にぴったりなかわいらしいうさぎやくまの柄の、ピンクのマスクもあった。そして、それらは一つ一つビニール袋に入れられてレジの前の小さいかごに入れられて置かれた。

数日後、私がお店のレジの前を通ったとき、かごの中の布マスクが減っていることに気がついた。母に聞くと、一人のサラリーマンの方が、「なかなか子供のマスクとかも無くて大変だったんですよ」と、喜んでもらって帰ったのだという。

この時私は、あることに気づいた。あのとき自分は、利益など自分のことしか考えていなかったのである。目の前の、いつも来てくださっているお客さんのために、今何かしたい、という気持ちが必要なかった。今大変なときこそ、皆で助け合うべきなのに。

生徒皆が感染しないように、毎日対策を考えてくださっている学校の先生方。ドラッグストアで消毒液を買おうとしていたときに、一つ譲ってくださいだったお姉さん。たくさんの方の助けや思いやりがあるから、私は毎日過ごせているんだな、と改めて感じた。

かごに入れられていた、たくさんあったマスクはもう無い。しかし、今日も誰かが、あのマスクを使って下さっているのかと思うと心が温まった。

また、私は病院に通っている。自粛中も行かなければならない時があり、その時母と、病院の先生にマスクを持っていこうか、という話になった。私の家も全然マスクが無かったのだが、そのときは県知事さんから箱のマスクをもらっていた。ずっとお世話になっている先生で、困っていらっしやったら大変だなと思ったのだ。

「先生、これ、良かったら使ってください。」と言ったが、医療従事者の方たちにはもうすでに良いマスクが配られているとのことだった。

「お気持ちだけ頂きます。」

そう言った先生が笑っていたので、私は驚いた。先生が笑っているところなんて、あまり見たことがなかったのだ。

結局、マスクは断られたが、気持ち伝わって、そしてなんと言っても誰かを笑顔にすることができたので、良かったと思った。

新型コロナウイルスは皆で協力すれば治まる、というものではなくと思うが、皆で協力すれば感染拡大を止めたり、被害を最小限にしたりすることができると思う。私も思いやりの心を忘れず、これからアフターコロナの社会で強く生きていこうと思った。

そして、マスクは人と人の間に布で壁をつくるのではなく、人と人を繋げる懸け橋になれるということを今回知り、私はマスク、やるじゃん！とマスクのことを見直したのだった。

へんなひと

福井県立三国高等学校 えびぽよ

私には二つ歳下の弟がいる。「普通」だったら勉強に励んだり、部活で汗を流したり、放課後に馬鹿騒ぎをしたり、恋人のひとりでもつくって青春というやつを謳歌する年齢だろう。しかし、彼のテストは赤点の連続、運動は大の苦手でこれといって何か特技があるわけでもなく、友達もいない。更には、すぐに自分の世界に入ってしまう、一人で何か喋っていたり、テレビに話しかけることも少なくない。残念で変わった弟だ。

小学生の時、そんな彼にある病名が見ついた。「ADHD（注意欠如・多動性障害）」最近はいぶ知られるようになった病名だが、当時の私には初めて耳にするものだった。母からそのことを告げられ私は間髪入れずに聞き返した。「ちゃんと治るの？」手術や入院が必要なのか。脳の病気なのか。無事完治するのかと、不安に思いながら。初めの頃は「ADHD」というよく分からないアルファベット4文字の病名をそんな風に捉えていた。しかし、それは私の浅はかな予想とは全く別のものだった。未だに十分理解しているとは言えないが、発達障害の一つで手術によって完治できる類のものではないと分かった。けれど、病名が見ついたからと言って私達家族が大きく変化することはなかった。

そのまま時は流れ、私も弟も高校生になった。あんなに小さくて、お姉ちゃんお姉ちゃんと私の後を付いて歩いていた弟が、今では私の背を追い抜いてしまった。けれど、大きく変わったのは背丈だけ、勉強も運動もあいかわらず苦手で、一人でよく喋っている。そんな彼について、私は大きな不安を抱くようになった。「彼の将来」について。

ある日、いつも通り習い事に向かった。母の車から足をひきずるように降ろし、力なくドアを閉めた。思えば、あの時既に私は限界だったのかもしれない。しかしあの時は、そんな実感はなかった。少し疲れているだけ。そう自分に言い聞かせていたが、その日は全く集中できなかつた。胸のあたりに何かつかえて、目が熱くなってきた、しだいに視界がゆがんでいった。先生には部屋に入るなり、「大丈夫？何かあったの。」と聞かれたが、別に何かあったわけではない。「ううん。何も。」と答えた。泣いちゃいけない、泣いたって仕方ない、泣くな。泣き虫は嫌いだ。私は泣いちゃいけない。迷惑をかけてはいけない。私がしっかりしなきゃいけないの。何度も何度も、強く思ったけれどダメだった。鼻をすすり、止まらない涙で目をはらし、ぐちゃぐちゃの顔をして泣いた。人前で泣いたのなんていつぶりだっただろう。先生は静かに話を聞いてくれた。私には将来マンガ家になるという夢がある。ただのマンガ家ではない。億を稼ぐようなマンガ家になるという夢だ。たくさん売れるマンガ家になって、きつと母を幸せにする。それが私の幼い頃から変わらない夢。母は私たちを一人で育ててくれた。どんなに苦労したことだろう。それでも母は、私に「マンガ家なんて…」とはひとことも言わなかった。周りの大人が口を揃えて私を否定し、小言を言い、嫌な顔をする中母だけは味方で居てくれた。そんな母の為に、私は頑張らなくちゃいけない。そう、「不出来な弟の分まで。」

その時、私は自分自身に驚いた。それと同時に冷たいものが背中を走った。私は最低だ。マンガ家という大きすぎる夢に不安になるあまり、私は自分自身の実力の無さを無意識に弟のせいにしていたんだ。手のかからない「普通」の弟だったら、私は都会に出ていけるのに。母を任せて家のことを任せて、自分の事に集中できるのに。もし「普通」の弟だったら。本当に最低だ。姉失格だ。貧しかったって、色んな事情があったって、その分努力して夢を叶えた作家さんは大勢いるのに、私は弟のせいにして自分自身と向きあえていなかった。そればかりか、弟に対してひどく失礼なことを考えていたんだ。やっと胸につかえていたものが取れた気がした。

そして気づいた。「普通」なんて存在しないんじゃないかと。私は弟に「普通」であることを求めている。けれど、じゃあ「普通」の人ってどんな人なんだ。色んな人を思い浮かべてみるけどみんなどこか欠けていて、同時に光るものを持っていた。私だってそうだ。そして弟も。勉強もダメ、運動もダメ、けれどあの子は優しい子だ。私なんかよりずっと。ただ、数字で表せないだけ。「普通」なんてものは存在しない。色んな人の平均値。ツギハギだらけの虚像でしかないんだと、その時私は理解した。普通の人なんていない。みんなどこかへんな人なんだ。良い意味にも、悪い意味にもみんな変わってる。みんな違うから社会は前に進むんだ。私も彼も、自分のなりたいものに向かってただ努力すれば良かったんだ。違うことを認め合って。